

25メートル特別枠のプログラムは究極の習熟度別学習

「何も言えねえ」

夏休みプールの検定合格後、スタート台に上がった際にある児童が思わず発した言葉です。その児童は、今年度から新設した「25メートル目標枠」に参加しました。初日は、5メートルをやっと泳げる位の泳力でしたが、一日も休むことなく「25メートル目標枠」の練習に意欲的に取り組み、プール検定では、何と50メートルを泳ぎ切ったのです。

私も「25メートル目標枠」には、指導者として毎日参加をしました。検定の際は、その児童に寄り添い、そばで励ましの声をかけ続けました。「ぶくぶく、ぱっ」という息継ぎのタイミングを届け、足が付きそうになった時には、「足ばたばた」とバタ足を促しました。ターンをしてからは「あと15メートル。あと10メートル」と絶えず声をかけました。その児童も私の声かけに応えるように必死の形相でもがくような泳ぎでゴールにタッチしました。浮かび上がった児童に「やった。50メートル合格おめでとう」とガッツポーズを送ると、児童は勇ましい姿でスタート台に立ち、その言葉を発したのです。

「何も言えねえ」は、ご存じ、水泳の北島康介選手が北京オリンピック100メートル平泳ぎで金メダルを獲得した際のインタビューでの名言です。児童は、その言葉の真似をしたのでしょうか。しかし、児童の50メートルを泳げたのだという驚きや興奮、感激が入りまじった表情は、北島選手が感じた思いをあたかも共有しているかのようでした。

「今まで、行く、行くと言いながらテレビの前から離れなかった子が、何も言わないでも自分から準備をしてプールに通いびっくりしました。25メートルを泳げたと興奮して帰ってきた娘の姿を見て目頭が熱くなりました」

(前任校 巻頭言 抜粋)

夏休みは、通常の教育活動では設定が難しい「より個々に照らし合わせた指導」が可能な期間でもあります。「25メートル目標枠」は、その中でも究極の習熟度別指導になり得るプログラムです。特別支援教育の視点に基づく「一対一の指導」が可能となるプログラムでもあります。

今までの実績（指導の成果、指導体制の工夫）を踏まえると、

3日間の設定。4、5、6年生を対象。午前中の通常枠とは切り離し、午後に設定が「ベター」かな、と考えています。そうすれば、午前の4、5、6年生の枠は25メートル以上泳げる児童が集まるわけですから、**泳力のある児童に特化した指導も可能**となります。まさに「**一挙兩得**」です。

コロナのこともありますが、来年度に向け、体育部の先生方と少しずつ「カリキュラムマネジメント」してまいります。